



マドンナ リリイ

60編は「ゆり」に合わせてとあります。ゆりは神殿の柱頭の上に飾りとして刻まれた花ですから、この曲は大事な、美しい詩編に用いられた曲なのではないでしょうか。ミクタムとも記されています。ダビデの詩、教えとあります。端書きにダビデがアラム・ナハラムおよびツォバのアラムと戦い、ヨアブが帰って来て塩の谷で一万二千人のエドム人を討ち取ったとき。(60:2)とあり、ダビデが北方からの侵略を防御し、ヨルダン川東岸の他民族アラム、アンモン、

モアブ、エドムと、死海の南の乾燥した荒れ野である塩の谷で戦った時のことを歌っています。サムエル記や歴代誌に、この勝利が記されています。

けれども60編は勝利、凱旋を歌っているのではなく、開戦を控え、動揺し、不安におののいている民の苦しみを訴えています。神よ、あなたは我らを突き放し／怒って我らを散らされた。どうか我らを立ち帰らせてください。あなたは大地を揺るがせ、打ち砕かれた。どうか砕かれたところを癒してください(60:3)

戦いは、民が神から離れたための神の怒りの警告であるから、受け入れねばならないと告白しています。そして、この苦難から助け出して、神のもとに帰らせて下さいと、救いを求めています。あなたの愛する人々が助け出されるように／右の御手でお救いください。それを我らへの答えとしてください(60:7)

と、神の託宣を求めています。神の託宣は わたしは喜び勇んでシケムを分配しよう。スコトの野を測量しよう(60:8)という言葉で始まります。シケムは最初の礼拝が行われた神聖な場所、スコトはヨルダン川流域の豊かな農地です。それを、褒美、褒賞として分け与えようというのです。ギレアドはわたしのもの／マナセもわたしのもの／エフライムはわたしの頭の兜／ユダはわたしの采配(60:9)と、ギレアド(ヨルダン川東岸地域)とマナセ(ヨルダン川流域の平原)はイスラエルの土地であると主張し、エフライム族、ユダ族の名前をあげて、神の民の指導者、指揮官と呼んでいます。それに対し、モアブはわたしのたらい。エドムにわたしの履物を投げ／ペリシテにわたしの叫びを響かせよう(60:10)と、異民族を侮蔑し、見下し、恫喝し、戦意を奮い立たせています。恐ろしい民族主義です。これが古代の民族、部族間の戦争の姿そのものなのでしょう。民は戦いを恐れ、包囲された町に／誰がわたしを導いてくれるのか。エドムに、誰がわたしを先導してくれるのか。神よ、あなたは我らを突き放されたのか。神よ、あなたは／我らと共に陣してくださらないのか(60:11)と、不安を隠せません。

この時、詩人は どうか我らを助け、敵からお救いください。人間の与える救いはむなしいものです。神と共に我らは力を振ります。神が敵を踏みにじってください(60:13)と、神への信頼を告白します。この信仰告白がイスラエルの民の基本であるために、60編が「教え」として端書きに記されたのでしょう。不思議なことに、60編7節以下の文言は108編7節以下と全く同じです。

『讚美歌21』にはこの詩編を歌う曲がありません。進軍、戦意高揚のための詩編だったかもしれませんが、ジュネーブ詩編歌は静かで落ち着いた、盛り上がりのある演奏を聞かせています。

[Psalm 60 Genevan Psalter - setting by Claude Goudimel - YouTube](#)